現在も存在し活動する国柱会と江戸の法華講

八紘一宇ということばを造語した田中智学については、「狂信的な日蓮主義者」、「狂信的な日蓮宗信者」と言われることが少なくない。

しかし、智学の組織した国柱会には、「はじめに」でも述べたように、宮沢賢治や石原莞爾、伊勢丹の創業者である小菅丹治のほかにも、国柱会の初代京都局長となった金子彌平、近衛文麿の父親で華族・政治家であった近衛篤麿、詩人の北原白秋夫人の菊子、思想家で文芸評論家の高山樗牛、日本医師会の会長を長くつとめた武見太郎なども会員として入会していた。

ほかにも、『小説神髄』を書き、演劇の改良運動を推し進めた坪内逍遥、日本の宗教学の創始者の一人である姉崎正治、維新の志士で後に宮内大臣にもなった田中光顕、アメリカの詩人であるポール・リシャール、『大菩薩峠』の作者中里介山、そして北原白秋自身なども、智学の影響を強く受けたとされている。

智学を狂信的な日蓮主義者としてその存在価値を否定して、果たして済むものなのだろうか、それは疑問である。しかも、智学の組織した国柱会は、現在でも、東京江戸川区の一之江に本部を構え、活動を展開している。

智学について見ていく場合、その信仰に大きな影響を与えたのが、父親の多田玄竜であった。

玄竜は、父親の意志に反して家出をしたことから、田中姓を名乗らず、遠い祖先の姓である多田を名乗っていた。その玄竜が改宗して加わったのが、駿河屋七兵衛をリーダーとする法華講、「寿講」であった（以下、智学については、田中香浦『田中智学』真世界社、大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法藏館、渡辺宝陽「田中智学」『講座日蓮4　日本近代と日蓮主義』春秋社などを参照）。

講というのは、もともとは仏教の儀式である法会のことをさしている。ところが、時代が進むと、共通の信仰をもつ人間たち、とくに庶民の集まりを講と言うようになった。たとえば、念仏を唱えるための念仏講である。あるいは、特定の巡礼地に参詣することを目的とした集まりも講と呼ばれるようになる。伊勢講や御嶽講などである。

江戸庶民のあいだでは法華講が盛んで、有力なものが八つあったことから「江戸八講」と言われた。寿講はそうした法華講の一つだった。

江戸では、日蓮に対する信仰が盛んで、日蓮のことは「お祖師さま（おそっさま）」と呼ばれた。現在でも、東京を中心にした関東の日蓮宗寺院では、日蓮の命日にちなんで、万灯や提灯をかかげ、団扇太鼓を叩き、「南無妙法蓮華経」の題目を唱えながら行列する「お会式」と呼ばれる行事が営まれているが、これは、他の地域の日蓮宗寺院では見られない行事である。

駿河屋七兵衛の場合には、古着屋を営んでいたが、日船という日蓮宗の僧侶に出会ったこと

influence of schism
Nichiren works re
lay believers

から信心をするようになり、やがて講の先達となる。門下は3000人にも及んだと言われるから、相当な組織力を発揮したことになる。

こうした講のメンバーは、皆在家の信者で、僧侶は含まれていなかった。江戸時代において、日蓮宗の僧侶は、「檀林」と呼ばれる施設で教学を学んだが、そうした檀林で学ぶことになるのは、日蓮の教えではなく、天台宗で説かれてきた天台教学であった。在家の信者たちには、それが不満で、直接、日蓮の残した文章である「遺文」を読み、独自の教えの体系を作り上げていった。それが、「俗法門」と呼ばれるもので、代表的なものに、日蓮を太陽の垂迹・化身と見る「日天子法門」があり、七兵衛は、この日天子法門の立場をとった。

Ganyu's conversion

いったんは日蓮宗の僧侶となったがすぐに還俗した田中智学

このように見ていくと、カリスマ的なリーダーを戴き、俗人のみで信仰活動を行った点で、寿講のような法華講は、近代に登場する日蓮系新宗教の先駆けであり、その原型と言うべきものであった。

七兵衛の筆頭弟子には、「法華の太吉」とも呼ばれた職人がいた。玄竜は、この太吉が住んでいた長屋と棟つづきに住んでいた。その時点で玄竜は念仏信仰をもっていたので、太吉と法論になった。玄竜は、その法論に負けてしまったため、法華に改宗した。

その後の玄竜は、熱心な信仰をもち、七兵衛の16人いる高弟の一人に数えられるようになる。『住本顕本義』という著作までものしたとされるが、これは現存せず、残念ながら、玄竜がどういった信仰上の境地に達していたかは分かっていない。

智学の本名は巴之助と言ったが、玄竜は巴之助を膝に抱き、「俳諧は詠むべし、俳諧師とはなるべからず。仏法はまなぶべし、僧侶とはなるべからず。味噌の味噌臭きは上味噌にあらず」と口癖のように言っていたという。

そこには、俗信徒としての誇りがかいま見られるが、玄竜とその妻は相次いで亡くなり、両親を亡くした智学は、10歳のときに、父親が熱心に信仰していた上に、その菩提を弔うためにということで、日蓮宗の寺に入門し、僧侶としての道を歩むことになった。これは、玄竜の考えにはまったく合わない選択だった。

僧侶になった智学は、日蓮宗一致派の初代管長となった新居日薩が発足させた芝二本榎の日蓮宗大教院で学んだりもするが、肺炎にかかって生死の境をさまよったりしたため、結局は、19歳のときに還俗している。日薩の主張が、穏やかに法を説く「摂受」にあり、それが、智学には生ぬるいものに思えたからだとも言われるが、僧侶を否定し、俗信徒としての誇りをもつ父親に育てられたことが、そこには強く影響していたはずだ。

実際、還俗して以降の智学は、日蓮宗全体の統一をめざすなど、僧侶と連携して活動するこ

とはあったが、生涯にわたって在家の立場を貫いている。

還俗した智学は、明治13（1880）年に仲間とともに日蓮仏教の研究会である「蓮華会」を発足させる。それは、日蓮の遺文を読み、日蓮教学について学ぶための場であった。この蓮華会は、明治18年1月に結成される「立正安国会」、そして、大正3（1914）年11月の「国柱会」へと結びついていく。

還俗した以上、智学は生きていくために仕事を必要としたが、そこで智学が就職先として選んだのが写真館であった。たまたま、蓮華会をともに結成した柴田富治が写真に彩色を施す写真画家を仕事としており、その柴田の紹介で、智学はドイツ人の経営する写真館に就職した。

智学は、晩年にラジオに出演したり、レコードの制作を行ったりしたが、こうした新しいメディアへの関心は、写真館で写真技術を学んだことにはじまると言える。そもそもメディアというものは、智学が国柱会の活動を展開する上で、極めて重要な意味をもった。それは演説会や膨大な文書による宣伝、あるいは雑誌、書物の刊行ということに示されている。

坪内逍遥から依頼され戯曲を執筆、歌舞伎座、帝劇で上演された田中智学

しかも智学は、それにとどまらず、「国性芸術」と称して、芸術運動まで展開することになる。それは、「芸術を通して道を説く、これ真の芸術なり」という、彼の主張にもとづくもの

であった。

この智学のことばからは、戦前に弾圧を受けた新宗教「ひとのみち」を、戦後、PL教団と改めた御木徳近が、昭和22（1947）年に「PL処世訓二十一か条」（現在の「PL処世訓」）の第1条を「人生は芸術である」としたことが思い起こされる。近代に生まれた宗教運動では、PL教団の他にも、大本やその流れを組む世界救世教や神慈秀明会でも芸術活動は盛んに行われている。真如苑でも、開祖の伊藤真乗は仏師でもあった（拙著『日本の10大新宗教』〈幻冬舎新書〉を参照）。智学の国性芸術の活動は、その嚆矢となるものであった。

智学の場合には、自らが創作活動を行っており、しかも、その分野は多岐にわたっていた。それを挙げれば、次のようになる。

舞楽（雅楽）　3曲
能楽　5曲
舞踏歌曲　15曲（長唄11曲、常磐津3曲、清元1曲、ただしそのうち古典の転用が3曲）
小品舞踊　36曲（主に端唄で、転用が30曲、洋楽が2曲）
短劇舞踊　5曲

童謡	3曲
吟舞	2曲（新体詩）
浄瑠璃	3曲（新曲）
国性劇	17篇
狂言	8篇

Isabouchi & Tanaka

智学の創作活動は明治25（1892）年に遡る。当時、智学は関西にいたが、「須磨の寝ざめ」という琴歌を作詞し、二弦の八雲琴で自ら作曲もしている。この年には、行進曲の「立正歌」や長唄の「法の船」も作詞作曲している。

舞楽については、明治35年11月に立正安国会の創業成満式を挙行するために、大阪の会員有志を集め、「雅頌部」を創設し、舞楽の練習を行っている（斎藤瑞暁「御事業は雅楽と偕に」田中香浦編『田中智学先生の思い出』真世界社）。

しかし、何より重要なのは、「国性劇」と呼ばれた演劇である。

そのはじめは、大正10年3月に歌舞伎座で25日間にわたって上演された「佐渡」であった。これは、大正10（1921）年が、日蓮生誕700年にあたっていたことによるものである。

1921

日蓮宗では、その記念事業として日蓮劇の上演を企画し、それを演劇改良運動をリードしてき

successful plays!

た坪内逍遥に依頼した。坪内は、そこで、智学に脚本の執筆を依頼したのである。

智学と逍遥は旧知の仲だった。両者の関係は、逍遥が明治19年に、日蓮の教義について知るために、立正安国会の本部として日本橋蠣殻町に建てられた立正閣を訪れたことにはじまる。「佐渡」上演の前年にあたる大正9年にも、逍遥が、新文芸協会の旗揚げ公演に「法難」を上演した際には、これが故郷安房で日蓮が地頭の東条景信の一行に襲われ、弟子一人を殺された上に、日蓮自身も斬られて深手を負った小松原法難を題材にしたものであったことから、智学に相談を持ちかけている。そうした縁があったことで、逍遥は智学に「佐渡」の脚本執筆を依頼したのだった。

智学は最初、自分は脚本を書いたことがなく、素人なのでと辞退した。しかし、説得され、7幕11場にも及ぶ史劇を書き上げた。それは、新文芸協会に所属する俳優たちによって歌舞伎座の本興行として上演された。

ただ、智学にとって初めての戯曲だけに、「脚本としてはなんといっても素人であるうえにいわゆるお説教もあり長科白も目だつ作品ではあるが、そのうちの『土の牢』などは今も感銘を与える格調ある名場面で」あったという（田中香浦『田中智学』）。

この「佐渡」を含め、智学は都合17篇の戯曲を書くことになるが、そのうち「社頭諫言」と「代々木の神風」は、帝国劇場でやはり本興行として上演され、一流の歌舞伎俳優が出演した。

「社頭諫言」は、日蓮が佐渡に流されることになり、その寸前に首を斬られそうになった竜口法難に取材したもので、昭和2（1927）年10月1日から25日まで上演された。日蓮は7世松本幸四郎がつとめている。「代々木の神風」は舞踊劇で、6世尾上梅幸が洋行するのに合わせて書かれたものだった。これは、昭和3年1月1日から22日まで上演された。

このように、智学の戯曲は、歌舞伎座や帝国劇場といった一流の劇場で、プロの俳優によって上演されたわけだが、智学本人としては、自分はあくまで素人であり、作品は、演劇の素人である門下生が役者をつとめるものであるということを建前にしていた。実際、そのような形で上演されたし、作品は日蓮や日蓮信仰に関連したもので、信仰を伝えるということに重点がおかれていた。

相手を言論で打ち負かす田中智学の折伏力

智学の活動は、実に幅の広いものであった。しかも智学は、自らがパフォーマーとしての資質を備えていた。それはとくに弁舌の才にあらわれていた。

立正安国会が結成された明治18（1885）年7月23日に、江東井生村楼という貸席で、浄土真宗の僧侶、美濃田覚念を中心とした仏教青年会が「耶蘇教退治仏教大演説会」なるものを開催した。そこに飛び入りしたのが智学だった。そのときの模様を、自由民権派の『朝野新

聞』同月26日付は、次のように報じている。

傍聴人は無慮二百余人にてかなりの盛会なりしに、黒衣を着たる老僧の、突然会主（美濃田のこと：筆者注）の席に入り来たり、愚僧は日蓮宗の僧田中智学と申す者なるが、耶蘇退治は兼て志願なれば同盟を許されよ、然らば直に一席の演説をなすべしといふに、会主も異議なく承諾したれば、老僧はうち悦び演壇に登りたるに、雄弁滔々として頗る愉快に論じ、聴衆の喝采を博した……（略）

このとき、智学は25歳だったので、老僧ということばは当たらないようにも思われるが、すぐれた僧の意味であろう。演説のなかには、浄土真宗を批判するような部分もあって、会主たちと論争にもなり、さらに会場は盛り上がったらしい。日蓮は、浄土教信仰を厳しく批判したわけだから、智学の演説にそうした部分が出てきても不思議ではない。

立正安国会の当初の活動は、貸席での演説会が中心だった。演説会は、智学が登壇すると必ず満員になった。それほど、彼の演説は聴衆のこころをとらえる力を発揮したのである。

では、その演説はどういったものだったのだろうか。

それについて、智学の弟子で、生涯国柱会の会員として活動した保坂智宙による思い出があ

る。それは、仏教青年会への飛び入りの前の月、6月4日のことだった。智学は、神田岩井町の岩井亭で、「竜口断刀論」という講演を行ったが、保坂が前座をつとめ、折伏について語った。

ところが、聴衆のなかの書生風の男性から、「ノーノー、新居日薩さんの説と違うぞ」とか、「優陀那院師の著作を読みなおしなさい」といった野次を飛ばされた。新居日薩とは、すでに述べたように、智学が大教院で学んでいたときに衝突している。優陀那院師とは、江戸時代に近世の日蓮宗学を集大成した優陀那日輝のことである。

この男性の発言で場内は騒然となったが、保坂はなんとか演説を終えることができた。その後に智学が登壇すると、いきなり、保坂をやりこめようとした男性を槍玉にあげ、次のように言い放ったという。

前弁士の説に対して、優陀那院の説に違うとか新居日薩の主義に背くとか評した人があったが、我等は、日蓮上人の題目を唱える者で、日輝や日薩の題目を唱える者ではないから、日輝や日薩の主義に適わなくっても、日蓮上人の主義に適う説を陳べさえすれば、それでいいのである。優陀那院の著作を読みなおせなどと余計な世話をやいて貰わなくってもいい。

これに対して、その男性は反論したが、結局、智学によって「折伏の大利剣をあびせかけられ」、その場を去っていったという（「妙化録〈明治43年から大正3年〉」、前掲『田中智学先生の思い出』）。

ここからは、智学の当意即妙の対応ぶりが伝わってくる。折伏を布教活動の中心においている以上、相手を言論によって打ち負かしていかなければならない。智学には十分にその才能が備わっていたのだ。

次々に新聞・雑誌を刊行する田中智学の多才と経営力

こうした演説とともに智学が力を入れたのが文書による伝道だった。日本でラジオ放送がはじまるのは大正14（1925）年のことで、智学が活動を開始した明治10年代には、有力なメディアといえば、活字媒体しかなかった。そこで智学は、明治19（1886）年6月から、『立正安国会報告』を出すようになり、それは、翌明治20年8月に創刊された『立正安国会会報』に受け継がれた。

その後、明治24年4月には機関誌『師子王』を創刊し、明治30年7月には月刊誌『妙宗』を発行する。これは、明治39（1906）年1月から週刊になっている。さらに、明治42年5月に『日蓮主義』を創刊するが、これは、明治45年3月に『妙宗』と合体され、旬刊の『国柱新

聞』に受け継がれる。

大正3（1914）年11月3日に、立正安国会に代わって国柱会が組織されると、大正8年10月に『毒鼓』を創刊し、翌大正9年9月には、タブロイド判の日刊新聞『天業民報』を刊行するようになる。これは、昭和6（1931）年12月に『大日本』と改題されるが、戦争が激化する昭和19年まで20年間にわたって発行された。その後も、国柱会では、さまざまな形で機関紙誌を刊行している。

宗教団体が日刊新聞を発行しているものとしては、現在なら創価学会の『聖教新聞』があるが、それ以外には例を見ない。その点で、智学が『天業民報』を刊行し続けたことは極めて重要なことになるが、それだけ彼は、メディアを重視していたのである。

智学は、単に出版物を刊行するだけではなく、「施本」という考え方を打ち出し、刊行した本や機関紙誌を各所に配る活動を積極的に行った。たとえば、明治32年4月には、全国の鉄道の駅943カ所で、当時の機関誌『妙宗』を毎号配布する「鉄道大施本運動」を展開した。

ただ、『天業民報』の場合、日刊で新聞を出すのは経済的な負担も大きく、当然ながら、赤字経営になった。そこで発揮されたのが、智学の経営の才能であった。智学は、自前で新聞を刊行できるよう、活字や輪転機を買っただけではなく、代理部を設けて、そこで薬品の取次や消火器の販売を行った。新聞の赤字を補うためである。

さらに、「醍醐館」という牛乳店の経営も行い、牛乳を配達する際に、道を説き、あわせて日常生活に関連する豆知識を載せた「乳歴」というビラをつけたりもした。

ほかにも、東京鶯谷の国柱会館には、「師子王医院」を設けたが、それは、関東大震災のときに救護班として活躍した。

このように智学という人物は、多面的な活躍をしており、多才であった。その点では、とても僧侶という枠のなかには収まりきらなかった。それも彼が、早々と還俗してしまった原因だろう。

田中智学が考案した日本で最初の仏式結婚式

では、こうした活動を展開するなかで、智学はいかにして、日蓮信仰を国体の観念に結びつけていったのであろうか。

それは必ずしも当初からのものではなかった。立正安国会を設立し、立正閣を拠点として本格的な活動をはじめた智学は、まず日蓮宗の宗門の改革ということを訴える。だが、すでに智学は還俗して、俗信徒として活動しているわけで、そうした在家仏教というあり方を正当化する理論を打ち立てなければならなかった。

そこで、明治19（1886）年には、「仏教夫婦論」という演説を行い、さらには、明治22

年には「仏教僧侶肉妻論」を書き上げている。「仏教夫婦論」では、仏教は死人を相手にするのではなく、生きた人間を相手にすべきであって、「葬式教ヲ廃シテ婚礼教トスベシ」と説かれた。そして、明治20年には、「本化成婚式」と呼ばれる仏式の結婚式を制定している。

これは、日本で最初の仏式結婚式であったと言われるが、それまでの結婚式は、家庭や料亭などで行われるもので、宗教がかかわることはなかった。神式の結婚式も、明治33（1900）年に、当時皇太子の地位にあった大正天皇が宮中三殿で行った結婚式が最初であった。そのことが刺激となって、一般国民も神式の結婚式を挙げるようになった。その点では、智学の考案した結婚式は、日本で最初の宗教にもとづく結婚式であったことになる。

こうした形で儀式を定めたことは、在家主義を徹底させる上で重要な意味をもった。一般の宗教において儀式を司るのは、聖職者と呼ばれる宗教の専門家である。仏教の場合には、出家得度した僧侶がそれを担うことになる。神道なら神主、キリスト教なら神父や牧師が行うのである。

ところが智学は、儀式を専門の宗教家には任せず、国柱会の会員がそれを担当するという方向性を選択した。そのため、独自の式服を定めた。それは、神主の服装に似ていると批判されたようだが、重要なことは、会員であれば誰もが儀式を司れるようにしたことである。素人でも儀式を司ることができるなら、僧侶などの聖職者は要らなくなる。それによって、在家主義

を徹底できるわけである。

日本仏教の各宗派において、僧侶と俗信徒との距離がもっとも近いのが浄土真宗の場合である。浄土真宗では、阿弥陀仏の絶対性が強調され、信徒であれば誰もが唱えることができる念仏の実践に中心がおかれているために、僧侶に対して特別な地位は与えられていない。そもそも浄土真宗の僧侶は出家ではないのである。

それに次いで距離が近いのが日蓮宗の場合である。開祖の日蓮は、天台宗において出家得度した僧侶であり、生涯その立場を貫いた。ただし、日蓮がもっとも関心を注いだのは、法華経にこそ釈迦の真実の教えが示されていることを明らかにし、それを否定する他の信仰が社会にはびこるのを阻止することであった。

したがって、日蓮は再三、彼の立場からは誤った仏法である「謗法」の取り締まりを為政者に求めた。日蓮は、個人の救済ということには関心を向けず、現実の社会のあり方を変えることに活動の中心をおいた。そのため他の宗派とは異なり、日蓮宗の僧侶は、本来は日蓮のように社会を変えることに奔走しなければならないのである。

ところが、日蓮没後の日蓮宗の宗門は、次第に体制化し、日蓮が行った国家を諫める活動をしなくなる。教学の面でも、すでに述べたように、開祖の教えを学ぶのではなく、天台教学に回帰していった。智学が還俗したのも、そうした宗門のあり方に満足できなかったからで、国

柱会の運動は、日蓮の本来の主張に立ち返ることを目的としたものであった。

智学が、自らの立ち上げた組織を、最初立正安国会と称したのも、法然の浄土教信仰を中心とした謗法の勢力を駆逐することを鎌倉幕府に進言した日蓮の『立正安国論』の精神に回帰しようとしてのことである。

そして、国柱会と改称したのは、日蓮が佐渡流罪中に記した『開目抄』にある「我れ日本の柱とならん」ということばに由来する。これは、「三大誓願」と呼ばれるもので、全体は、「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」というものである。

日蓮は、単に仏法の世界を深めていくことだけに関心をむけるのではなく、常に現実の社会、現実の日本社会のあり方ということを問題にした。智学は、その日蓮の精神を受け継ぎ、それを現実化していくために、立正安国会や国柱会の運動を推し進めたわけである。

田中智学の「法国冥合」と日蓮の「三大秘法抄」

智学がそうした考え方を明確にしたのが、「本化妙宗式目」と呼ばれる彼独自の教義の体系においてだった。42歳になった智学は、明治35（1902）年の8月から9月にかけて、鎌倉にあった書斎にこもり、一気にそれを完成させた。智学は、1年かけて、これを講義し、その講義録は、『本化妙宗式目講義録』全5巻にまとめられた。

debates over authenticity of texts

そこで智学が強調したのが、「法国冥合」という考え方であった。この法国冥合ということばは、智学が独自に使ったもので、一般には、「王仏冥合」と呼ばれることが多い。王仏とは世俗の法である王法と釈迦の説いた仏法をさし、それが一つに融合されることが王仏冥合である。智学の法国冥合も、意味するところは同じである。

法国冥合も王仏冥合も、ともにその根拠は、日蓮の遺文、「三大秘法抄」に求められている。この「三大秘法抄」は、「三大秘法禀承事」とも呼ばれ、弘安4（1281）年4月8日に甲斐国身延で執筆されたとされている。このとき日蓮は60歳で、亡くなるのは翌年の10月13日のことであった。

「三大秘法抄」が執筆された時点で、日蓮はすでに病に苦しんでおり、まとまった理論的な文章を書けたとも思えないのだが、内容的にも、本当に日蓮の手になるものなのかどうか、日蓮の教えを学ぶ者たちのあいだでは昔から議論になってきた。

日蓮は、膨大な文章を残しているが、そのなかには、「真筆」、あるいは「真蹟」と呼ばれ、日蓮自筆のものが残っているものもあれば、写本でしか残っていないものもある。「三大秘法抄」は、写本でしか残っておらず、その写本も、15世紀はじめのものがもっとも古い。その時点ではすでに、日蓮が亡くなってから百数十年が経っていた。

実際には、「三大秘法抄」は、日蓮の手になるものではなく、後世に日蓮に仮託されて作ら

れたものと考えられる。だが、現在でも、「三大秘法抄」は、日蓮が書いたものだとする日蓮信仰者は少なくない。日蓮宗の教義をまとめた「日蓮宗宗義大綱」でも、「三大秘法抄」に説かれた三大秘法が教義の中核に据えられている。智学も、「三大秘法抄」が本物の日蓮の遺文であることを前提に議論を進めている。

三大秘法は、「本門の本尊」、「本門の戒壇」、「本門の題目」の三つから成り立っている。本門の本尊は、日蓮が、佐渡に流罪になったときから書き著すようになった「本尊曼荼羅」のことである。これは、「南無妙法蓮華経」の題目を中心に、その周囲に、さまざまな仏や菩薩、あるいは神々の名を記したものである。日蓮宗では、これを本尊としてきたことから、本尊曼荼羅と呼ばれる。

本門の題目というのは、本尊曼荼羅の中心にも描かれた「南無妙法蓮華経」の題目のことである。日蓮の信奉者は、さかんにこの題目を唱えるし、日蓮宗の寺院に行けば、日蓮が書いた「南無妙法蓮華経」の文字を石碑にして建てているところが多い。

問題は、本門の戒壇である。戒壇というのは、一般的には、僧侶、あるいは尼僧に対して戒律を授けるための壇のことである。有名なものとしては、東大寺に設けられた戒壇がある。これは、奈良時代の終わりに唐から招かれた鑑真が来日してから設けられたものである。それまで、日本には正式に戒律を授ける資格をもつ「戒師」がいなかった。だからこそ鑑真が招かれ

Tanaka's interpretation of kaidan

たわけだが、同時に、下野薬師寺と太宰府観世音寺にも戒壇が設けられ、正式に僧侶になるためには、そうした戒壇で戒律を授かる制度が確立された。

田中智学が訴えた賢王＝天皇による道義的世界統一

本門の戒壇について、「三大秘法抄」には、次のように述べられている。

戒壇とは、王法仏法に冥じ、仏法王法に合して、王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて、有徳王・覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時、勅宣並に御教書を申し下して、霊山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者か。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是なり。三国並に一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王・帝釈等も来下して踏み給ふべき戒壇なり。

ここで重要なことは、戒壇が、勅宣や御教書を戴いた上、浄土に近い清浄な地に建てられるべきだとされている点である。それからすると、本門の戒壇は、一般的な戒壇とは性格がかなり異なるものになる。

智学は、「勅宣並に御教書」の部分を、天皇が戒壇建立の大詔を渙発し、帝国議会で戒壇建

立を議決することとしてとらえた。当時の政治体制を踏まえれば、そうした手続きが想定されるのは当然であった。

ただし、智学の主張はそれにとどまっていない。本門の戒壇の建立によって、日本は法華経の教えにもとづいて統合されることになるが、「三大秘法抄」では、さらに、「三国並に一閻浮提」に言及されている。三国とは、仏法が伝えられてきたインド、中国、日本をさし、一閻浮堤は世界全体のことをさす。これにもとづいて智学は、法華経の教えによる世界の統合を最終的な目標に定めたのだった。

この時点で、智学はまだ、八紘一宇ということばを造語してはいない。しかし、この発想は、明らかに八紘一宇に通じるものである。

しかし、法華経信仰による世界の統合と言っても、日本以外の国々がそれを簡単に受け入れることはあり得ない。三国に含まれるインドや中国にしても、インドでは仏教そのものが消滅してしまっているし、中国でも、仏教信仰はかなり力を失っている上、法華経を信奉する天台宗も仏教界全体を支配しているわけではない。

そこで智学は、日蓮の『撰時抄』にある「前代未聞の大闘諍（とうじょう）一閻浮堤に起こるべし」という部分をもとに、それを信仰をめぐる大戦争が勃発する予言として解釈し、さらには『観心本尊抄』をもとに、その戦いが、「賢王」と「愚王」との間のものであるとした。そして、賢王

を天皇としてとらえた。賢王としての天皇が愚王を倒し、それによって法華経信仰が他の国々にも行き渡る。それによって、のちに智学が『日本国体の研究』で示したように、世界の道義的統一がはかられるというのである。

これによって、三大秘法の考え方は、「国体論」へと発展していくことになる。

大逆事件と『日本国体の研究』での国体擁護

智学は、明治42（1909）年5月12日に、『日蓮主義』という月刊の機関誌を創刊するが、その表紙には、多くの標語が印刷されていた。そのなかには、「我れ国体擁護の為に言はん　我れ国体擁護の為に起たん　我れ国体擁護の為に誓りて此に畢生の心血を注がん」というものがあった。これが、日蓮の三大誓願をもとにしたものであることは明らかだが、智学はこれによって国体擁護の重要性を強調しているわけである。

注目されるのは、表紙に記されたもう一つの標語、「国祖を日神といひ国号を日本といふ釈尊の姓は日種氏なり　聖祖の名は日蓮なり　日は万有を統照し且つ統率す」である。インドには、民族を日種氏と月種氏に分ける伝説があるらしい。本章のはじめの部分で、智学の父、多田玄竜が入門した寿講の講元、駿河屋七兵衛が、太陽を神格化した日天子法門を信奉したことにふれたが、あるいはここに、その影響が見られるのではないだろうか。

智学は、その年の7月から、大阪にあった立正閣という建物を静岡の三保に移転する工事をはじめる。それは翌年の10月に完成し、最勝閣と呼ばれる。最勝閣の名は、「三大秘法抄」にある「最勝の地」に由来し、富士山を仰ぎ見ることができる三保が、それに比定された。そして、最勝閣の最上階は、「侍勅殿」と名づけられ、天皇の勅宣を待つ場とされたのだった。

最勝閣が完成した明治43年には、社会主義者の幸徳秋水らが天皇暗殺を企てたとして検挙され、12名が死刑に処せられた「大逆事件」が起こる。これは、実際には冤罪であったが、智学はそれに危機感を抱き、国体擁護を強調するようになる。翌明治44年8月の三保での講習会からは、「国体学」という用語を使うようになり、それから国体学関連の著作を次々に発表していく。それが、大正11年の『日本国体の研究』の刊行に結びつき、そのなかで、智学は「八紘一宇」という章を設けて、それについて論じたわけである。

この八紘一宇ということばは、『日本書紀』から導き出されてきたものではあるが、その背景には、天皇を戴き、法華経によって世界を統合するという智学の本門戒壇論があったのである。

こうした形で、智学において、日蓮に対する信仰は国体論へと発展していった。日蓮自身の思想のなかでは、天皇という存在は決して重要視されてはいない。ところが、日蓮の生きた鎌倉時代とは異なり、明治の社会において、天皇は最高権力者に祀り上げられた。智学はそれを

Tenno as wheel-turning King

踏まえ、天皇を「三大秘法抄」で言及された賢王としてとらえたのだった。

仏教には、釈迦が生まれたとき、将来において悟りを開いて仏陀になるか、それとも、政治権力を掌握して世界を支配する「転輪聖王（てんりんじょうおう）」になるか、どちらかだと予言されたという伝説がある。賢王は、この転輪聖王に近い存在であり、智学は両者を重ね合わせてとらえた。そして、天皇こそが転輪聖王であるとしたのである。

大正の終わりから昭和のはじめの時代になると、智学の活動は、宗教的な要素を後退させ、もっぱら国体論に傾いていく。それは、戦争の時代に深く入り込んでいった日本社会全体の動向と重なり合うもので、その分、智学の運動は体制化していったのである。